

梅堯臣詩の「平淡」をめぐる

湯 浅 陽 子

はじめに

北宋期の新しい詩風の形成に寄与した人物のひとりと目される梅堯臣（一〇〇二〜一〇六〇）の詩は、しばしば「平淡」と評されてきた。例えば錢鍾書氏『宋詩選註』（一九五七年初版）の梅堯臣の項では、「西崑體起來了、愈加脫離現實、注重形式、講究華麗的詞藻。梅堯臣反對這種意義空洞語言晦澀的詩體、主張『平淡』、在當時有極高的聲望、起極大的影響。」と記され、また笈文生氏『梅堯臣』（岩波書店 中國詩人選集第二集3 一九六二年）解説では、「この情性と平淡、わけても平淡の語は、彼の主張の眼目であった。…など、彼の詩にしばしば見えるものである。もっとも後世の人からは、時に彼の詩の平淡さが逆に論議の対象とされた。」等と記されているように。これらに示された、梅堯臣が詩の「平淡」を主張したという認識は、現在もかなり広く行われ、いわば暗黙の了解になっているように思われる。しかしその一方で、梅堯臣詩の「平淡」が具体的にどのようなものであるのか、あるいは「平淡」という詩風も含んだ、梅堯臣の詩作全体の持つ様々な性格がどのようなものであるかについても、詳細に検討すべき点はまだ数多く残されているように思われる。そこでここでは、梅堯臣の詩の性格についてさらに考察を深めるための手がかりとして、あえてその「平淡」という属性について検討してみたい。

一 歐陽脩による梅詩評

周知のように、歐陽脩（一〇〇七〜一〇七二）と梅堯臣は、北宋仁宗天聖九年（一〇三二）に錢惟演（九六二〜一〇三四）留守在任下の西京（現河南省洛陽市）で同僚となった後、嘉祐五年（一〇六〇）に梅堯臣が没するまで親しい交遊を続けた。また梅堯臣・蘇舜欽（一〇〇八〜一〇四八）・石延年（九九四〜一〇四一）らは、政府高官でありかつ當時を代表する文人でもあった歐陽脩を中心としてひとつの文学グループを形成し、共に新しい詩風を模索した。彼らが残した数多くの応酬詩からは、歐陽脩が梅・蘇・石らの詩文の才を高く評価しつつ、その一方で不遇な境涯にある彼らを様々に援助し、また推挽していた様子を知ることができる。

歐陽脩は『六一詩話』及び数多くの詩文のなかで、梅堯臣・蘇舜欽・石延年の詩作を高く評価しているが、そのうち梅堯臣詩に対する評価について、南宋・葛立方（？〜一一六四）は『韻語陽秋』巻一（清・何文煥輯『歷代詩話』 中華書局 一九八一年 所収本）で次のように述べている。

歐公一世文宗、其集中美梅聖俞詩者、十幾四五。稱之甚者、如「詩成希深擁鼻謳、師魯卷舌藏戈矛。」又云、「作詩三十年、視我猶後輩。」又云、「少低筆力容我和、無使難追韻高絶。」又云、「嗟哉吾豈能知

子、論詩頼子能指迷。」聖愈詩佳處固多、然非歐公標榜之重、詩名亦安能至如此之重哉。歐公後有詩云、「梅窮獨我知、古貨今難賣。」而聖愈「贈滁州謝判官」詩亦云、「我詩固少愛、獨爾太守知。」皆言識之者鮮矣。張芸叟評其詩云、「如深山道人、草衣捆屨、王公大人見之屈膝。」

歐公は一世の文宗にして、其の集中に梅聖愈詩を美むる者は、十に四五に幾し。之を稱すること甚しき者は、「詩成り希深は鼻を擁して驅ひ、師魯は舌を巻きて戈矛を藏す」（「哭聖愈」居士集卷八 嘉祐五年）の如し。又云く、「詩を作ること三十年、我を視ること猶ほ後輩のごとし」（「水谷夜行寄子美聖愈」同卷二 慶曆四年）と。又云く、「少低 筆力 我を容れて和し、韻の高絶を追ふこと難からしむる無し」（「病中代書奉寄聖愈二十五兄」同卷二 慶曆五年）と。又云く、「嗟哉 吾 豈に能く子知らんや、詩を論ずるに子を頼りて能く迷ひを指す」（「再和聖愈見答」同卷五 皇祐二年）と。聖愈の詩 佳き處は固より多し、然るに歐公の標榜することの重きに非ざれば、詩名亦た安くんぞ能く此くの如きの重きに至らんや。歐公 後に詩有りて云へらく、「梅の窮するは獨り我のみ知る、古貨 今は賣ること難し」（「水谷夜行寄子美聖愈」同卷二 慶曆四年）と。而して聖愈「滁州謝判官に贈る」詩（「方在許昌幕內弟滁州謝判官有書邀余詩、送近聞歐陽永叔移守此郡、爲我寄聲也」宛陵集卷二十六 慶曆五年）に亦た云へらく、「我が詩は固より愛でらるること少なく、獨り爾が太守の知るのみ」と。皆な之を識る者の鮮きを言へり。張芸叟其の詩を評して云へらく、「深山道人の如く、草衣捆屨するも、王公大人 之に見れば膝を屈す」と。

葛立方はここで梅堯臣の詩には確かによいものが多いが、これほどの

詩人としての名声を得ることができたのは、一時代を代表する文章の大家である歐陽脩が高く評価したことに負うところが大きいと考えている。このような見かたに立つならば、現代に到るまで梅堯臣の詩風がしばしば「平淡」と評されるのにも、歐陽脩による批評が大きな影響を与えていることが予想されるだろう。

そこで歐陽脩の梅詩評を検討してみると、後人の梅堯臣詩に対する「平淡」評に大きな影響を与えたと考えられるものとして、『六一詩話』（歴代詩話本）の次のような表現を挙げることができる。

聖愈平生苦於吟詠、以閑遠古淡爲意、故其構思極艱。聖愈は平生吟詠に苦しみ、閑遠古淡を以て意と爲す、故に其の構思すること極めて艱し。

ここで歐陽脩は、梅堯臣が詩作の理想とする「閑遠古淡」、つまり静かで古雅な趣を得るために苦吟していると述べているが、この「閑遠古淡」と「平淡」とはだいたい同様の内容を表していると考えてよいだろう。

また歐陽脩は同じ『六一詩話』で、梅堯臣の詩風を蘇舜欽のものと比較して、次のようにも評している。

聖愈子美齊名於一時、而二家詩體特異。子美筆力豪雋、以超邁橫絶爲奇。聖愈覃思精微、以深遠閑淡爲意。各極其長、雖善論者不能優劣也。余嘗於「水谷夜行」詩畧道其一二云。…

聖愈・子美は名を一時に齊しくす、而るに二家の詩體は特に異なれり。子美は筆力豪雋にして、超邁橫絶を以て奇と爲す。聖愈は覃思精微にして、深遠閑淡を以て意と爲す。各おの其の長ずるを極め、善く論ずる者と雖も優劣すること能はざるなり。余 嘗て「水谷夜行」詩に於いて畧ぼ其の一二を道ひて云く。…

ここでは生前から詩人として同様に評判が高かった両者の詩風を対比し、蘇舜欽の詩風の特徴を人の意表を突く型破りのスケールの大きさに見、それに対して梅堯臣の詩風の特徴を、深い考えを精密にめぐらせた「深遠閑淡」、つまり奥深く穏やかな淡泊さに見出している。この「深遠閑淡」もやはり「閑遠古淡」に近似の内容を表すと考えてよいだろう。

このようにいずれの資料においても歐陽脩の梅詩評はほぼ同じ「平淡」に類する内容を繰り返していると言っているが、ここで注意しておきたいのは、いずれの資料においても平淡に類する評は、「吟詠に苦しみ」「其の構思すること極めて艱し（思いを巡らすことに極めて苦しむ）」「覃思精微（深い思考が精密である）」といった苦吟への言及を伴っていることである。これらの表現は、歐陽脩が梅堯臣の奥深く静かな詩風の前提として、沈思や苦吟の過程を必要と考えていることを示しているだろう。つまり「平淡」は軽々と生み出される詩境とは考えられないのだ。

二 梅堯臣による自作評

では梅堯臣自身は自作に対する評価をどのように受け止め、また自らの詩風をどのように捉えていたのだろうか。『六一詩話』にはそれを窺わせる記述も見ることができ。

晏元獻公文章擅天下、尤善爲詩、而多稱引後進、一時名士往往出其門。聖俞平生所作詩多矣、然公獨愛其兩聯、云、「寒魚猶著底、白鷺已飛前。」又「絮暖蕉魚繁、露添蓴菜紫。」余嘗于聖俞家見公自書手簡、再三稱賞此二聯。余疑而問之、聖俞曰、「此非我之極致、豈公偶自得意於其間乎。」乃知自古文士不獨知己難得、而知人亦難也。

晏元獻公の文章 天下を擅にし、尤も善く詩を爲り、而して多く後進を稱引し、一時の名士は往往にして其の門より出づ。聖俞の平生作る所の詩多し、然るに公は獨り其の兩聯を愛づるのみにして、「寒魚は猶ほ底に著き、白鷺は已に前に飛ぶ。」又た「絮暖かにして蕉魚は繁く、露添ひて蓴菜は紫なり。」と云ふ。余嘗て聖俞の家に于いて公の自ら書ける手簡を見るに、再三此の二聯を稱賞す。余疑ひて之を問ふに、聖俞曰く、「此は私の極致に非ず、豈に公は偶たま自ら意を其の間に得しか」と。乃ち知れり 古へより文士は獨り知己を得難きのみならず、而して人を知ることまた難きなりと。

ここでは晏殊（九九一〜一〇五五）が賞賛した梅堯臣の二つの対句が、梅堯臣自身の自信作ではなかったことを述べているが、引用されている二つの対句を含む詩は、次の二首である。

決決堰根水	決決たり堰根の水
層層湖上田	層層たり湖上の田
寒魚猶著底	寒魚 猶ほ底に著れ
白鷺已飛前	白鷺 已に前に飛ぶ
履惜春泥滑	履は春泥の滑かなるを惜しみ
衣從澁蔓牽	衣は澁蔓の牽くに從ふ
偶來成野望	偶たま來たりて野望を成し
歸興自留連	歸興 自ら留連す

「和仲文西湖野步至新堰二首」其一
 （宛陵集卷二十九 慶曆七年（一〇四七））

往時初渡江	往時 初めて江を渡り
頗愛江南美	頗る江南の美しきを愛づ

誰知坐臥間 誰か知らん坐臥の間に

思及烟波裏 思ひて烟波の裏に及ぶを

絮逐鮎魚繁 絮は鮎魚の繁きを逐ひ

豉添純線紫 豉は純線の紫なるに添ふ

君行語風物 君 行くに 風物を語る

到日應相似 到れる日 應に相ひ似たるべし

〔送王判官之江陰軍帳〕易知（同）

これらはいずれも、魚鳥や植物によって構成された、人の心を穏やかな喜びで満たすような春先の水辺の光景を描いたものであり、所謂「平淡」の気分に適うものだろう。しかし『六一詩話』の記すところによると、梅堯臣自身はこれらの詩句を最高傑作と考えてはいなかったらしい。

彼がどの詩句を自己の最高傑作と考えていたのかは明らかではないが、梅堯臣の場合のみならず、他人が評価する作品が必ずしも作者自身の会心の作であるとは限らないだろう。またさらに穿った見方をするなら、これまでに挙げたものを含む数多くの、『六一詩話』やその他の詩文に記された歐陽脩による梅堯臣の作品や人柄に対する評価からは、梅堯臣のよき理解者であるという自負を感じ取ることができるが、それらもまた梅堯臣自身の考えと全面的に合致していたとは言い切れないのではないだろうか。このことに関わっては、劉攽（一〇二二—一〇八八）『中山詩話』（歴代詩話本）にも、

永叔云、「知聖俞詩者莫如某、然聖俞平生所自負者、皆某所不好、聖俞所卑下者、皆某所稱賞。」

永叔云へらく、「聖俞の詩を知る者は某に如くは莫し、然るに聖俞の平生自負する所の者は、皆な某の好まざる所にして、聖俞の卑下する所の者は、皆な某の稱賞する所なり」と。

と、歐陽脩の、梅堯臣が日頃自負する作はみな自分の好まないものであり、彼が卑下する作はみな自分の褒めるものだと、両者の好みの食い違いに触れた言葉が記されている。つまり『六一詩話』に記された梅堯臣の言葉は、歐陽脩という聞き手によって理解され、さらにかなり後になって文章化されたものであり、歐陽脩による編集を経たものであることも留意しておくべきではないだろうか。むしろここに挙げた『六一詩話』の、知己を得ることの難しさ語る梅堯臣の言葉からは、本当に自己や自己の作品を理解してくれる人は見つけ難いという嘆きや孤独感を読みとることも可能かもしれない。

ここで話を元に戻すと、ここに挙げた『六一詩話』の章段で梅詩を称賛していた晏殊との間で、梅堯臣は慶曆六年（一〇四六）に幾篇かの詩を応酬しているが、そのなかの十韻二十句からなる古詩「依韻和晏相公」（宛陵集卷二十八）のなかで、自らの詩作について言及している。次にこの詩を資料として、梅堯臣自身の自作に対する考え方を検討してみた。なお当時梅堯臣は許昌（現河南省）に滞在しており、晏殊は知潁州（現安徽省西北部）に在任中であつた。晏殊の原作は佚している。

微生守賤貧	微生	賤貧を守り
文字出肝膽	文字	肝膽より出づ
一爲清潁行	一たび清潁の行を爲すに	
物象頗所覽	物象	頗る覽る所となる
泊舟寒潭陰	舟を寒潭の陰に泊むるに	
野興入秋莖	野興	秋莖に入る
因吟適情性	因りて吟ずるに情性に適ひ	
稍欲到平淡	稍 <small>さうやく</small> 平淡 <small>へいたん</small> に到らんと欲す	
苦辭未圓熟	苦しむらくは	辭の未だ圓熟せずして

刺口劇菱茨 口を刺すこと菱茨よりも劇しきを

ここで梅堯臣は、自己の詩作の方法を具体的な例を示して晏殊に説明している。それによると、この時の潁水の旅のなかでも特に、冷たい水を湛えた淵に舟を泊めたおりに、秋の荻の芽に感じた野趣を吟詠したところ、その時に自己が抱いた感興にびったりと合い、次第に「平淡」の状態に近づくものとなったと言ふ。このような表現は、梅堯臣自身が自己の詩作における「平淡」の志向に言及したものと見て、注目すべきであらう。またさらにここでは、「詩の言葉がまだ十分に熟達していないために、菱や水路よりも激しく口を刺激することに苦しんでいる」とも述べており、やはり「平淡」の状態を実現するためには、摩擦や刺激を感じさせる言葉を次第に精錬し、詩語を「圓熟」させていく過程が必要であるという認識を示している。これらの表現はいずれも既に見た『六一詩話』等の梅詩評と矛盾しないものであり、歐陽脩による梅詩評が梅堯臣自身の語るこのような認識を踏まえたものであることを窺わせる。

さらにここで注意しておきたいのは、「平淡」の語の使用である。前章で見た歐陽脩の梅詩評では「閒遠古淡」「深遠閒淡」、また「清切」「清新」「古淡」という語を用い、その意味内容は近似していても「平淡」の語を直接用いることはなかったことに注意したい。つまり梅堯臣の詩作に関わって「平淡」という語を用いることは、梅堯臣自身の表現に始まると考えられる。

「平淡」という語は人柄の淡泊さを指して使用されることもあるが、文学批評用語としては、作法的でない自然さや詩文の質朴さを指す語として、六朝期から詩評に用いられてきたものであり、例えば梁・鍾嶸『詩品』巻中（歴代詩話本）の晉弘農太守郭璞の項では、「憲章潘岳、文體相輝、彪炳可玩。始變永嘉平淡之體、故稱中興第一。」（潘岳を憲章と

し、文體相ひ輝き、彪炳して玩ぶべし。始めて永嘉平淡の體を變じ、故に中興第一と稱さる。）と、陸機（二六一―三〇三）・陸雲（二六二―三〇三）、左思（二五三?―三〇七?）らの没後の西晉惠帝の永嘉年間（三〇七―三二三）の詩風を「平淡」と評している。

また時代が下って中唐・韓愈の「送無本師歸范陽」詩（韓昌黎詩繫年集釋卷七 上海古籍出版社 一九八四年）では、還俗前の僧無本（賈島）の詩作について、

狂詞肆滂葩 狂詞 滂葩を肆にし

低昂見舒慘 低昂 舒慘を見す

姦窮怪變得 姦 窮まり 怪 變はり得て

往往造平淡 往往にして平淡に造る

と評している。ここでは無本の詩が、常軌を逸した言葉で盛んな華やかさを恣にし、低く抑えまた高く揚がり、ゆったりとしていたりまたいたましい様子であったりするという様々な変化を見せ、その乱れを極めて怪しく変貌し、そのうえで遂に「平淡」に至ると述べている。これは詩の「平淡」が初めから得られるものではなく、ある過程を経て初めて獲得されるものとする点で、既に見た歐陽脩の、梅堯臣の奥深く静かな詩風を、沈思や苦吟の結果もたらされるものと捉え、また梅堯臣自身の、「平淡」の状態を実現するためには、やはり摩擦や刺激を感じさせる言葉を次第に精錬し、詩語を「圓熟」させていく過程が必要であるという考え方に通じるものである。

ここで話を梅堯臣と晏殊との応酬に戻すと、同じ慶曆六年（一〇四六）には、「以近詩贄尚書晏相公、忽有酬贈之什、稱之甚過、不敢輒有所叙、謹依韻綴前日坐末教誨之言、以和（近詩を以て尚書晏相公に贄とするに、忽ち酬贈の什有り、之を稱すること甚だ過ぎたり、敢へて輒ち叙する所

有らず、謹みて依韻して前日坐末に教誨するの言を綴り、以て和す」
 (宛陵集卷二十八) が制作されている。これは題に示されているように、晏殊の語った詩論をまとめた詩だが、さらに梅堯臣の自註の形で晏殊が教え諭した言葉が附している。晏殊はまとまった形の詩論を残していないので、この詩及び註は彼の詩に対する考え方を知らぬ資料ともなり得るだろう。なお晏殊の「酬贈之什」は、これも既に失われている。

嘗記論詩語 嘗て詩を論ずる語を記すに

辭卑名亦淪 辭 卑しくして名は亦た淪む

(公曰、名不盛者辭亦不高。(公曰く、名盛んならざる者は辭も亦た高からず、と。))

寧從陶令野 寧ろ陶令の野に従ひ

(公曰、彭澤多野逸田舎之語。(公曰く、彭澤 野逸田舎の語多し、と。))

不取孟郊新 孟郊の新しきは取らず

(公曰、郊詩有五言一句全用新字。(公曰く、郊の詩 五言一句 全て新字を用ふる有り。))

琢礫難希寶 礫を琢くも寶を希ふこと難く

嘘枯強費春 枯を嘘くも強ひて春を費さん

今將風什付 今 風什を將て付すに

可與二南陳 二南と與に陳ぬるべし

ここで示されている晏殊の詩論は、「詩語が卑俗であれば詩人としての評判もまた駄目になってしまう。」また、「陶淵明の飾り気のない用語に習っても、孟郊の新奇な用語は採らない。」の二点に整理することができる。このうち詩語の卑俗さを戒める前者には、『六一詩話』中の、「聖俞嘗云、詩句義理雖通、語涉淺俗而可笑者、亦其病也。(聖俞

嘗て云へらく、詩句の義理通つると雖も、語の淺俗に涉りて笑ふべき者は、亦た其の病なり。)」との内容上の近似を認めることができる。

晏殊が主張している、詩語の洗練の追求と、陶淵明的な飾り気のなさの習得は、一見矛盾したものであるようにも感じられるが、詩句を洗練雕琢した結果としての飾り気のなさを評価していると考えれば、問題はないだろう。またこのように考えるならば、先の詩に見られた、詩句の洗練の結果としての「平淡」を追求するという詩作のありかたとも重なるものともなるだろう。

なお梅堯臣は、この他にも詩句を洗練して「平淡」に至るべしという理想を、「讀邵不疑學士詩卷、杜挺之忽來、因出示之、且伏高致、輒書一時之語、以奉呈」(宛陵集卷四十六)で、「作詩無古今、唯造平淡難。(詩を作るに古今無く、唯 平淡に造ること難し。)」と表現している。

また晏殊は、陶淵明の飾り気のなさに学ぶべしとも述べていたが、梅堯臣自身にも、「寄宋次道中道」詩(同卷二十五)に「中作淵明詩、平淡可擬倫。(中に淵明詩を作し、平淡にして擬倫すべし。)」という表現があり、陶淵明詩を「平淡」と評して、宋氏の兄弟がこれに学ぼうとしていると記している。梅堯臣自身が陶詩に学んだ詩の作例としては、皇祐元年(一〇四九)に陳州から父の喪に服するために宣城に帰った際の「擬水西寺東峰亭九詠」(樓煙鳥(宛陵集卷三十六)の、

斑斑遠林鳥 斑斑たる遠林の鳥

極目波煙中 極目 波煙の中

各識時早春 各おの時の早春なるを識り

不忘巢西東 巢の西東を忘れず

推物得眞意 物を推して眞意を得

吾將効陶公 吾 將に陶公に効はんとす

と、陶淵明に学ぼうとする姿勢を明らかにしつつ、春がすみの彼方にあ
る遠い林の木に憩う鳥の姿から「眞意」を捉えようとする、よく知られ
た陶淵明「飲酒二十首」其五を思わせる表現を挙げることができる。

さらに言うならば、陶淵明の詩風を「平淡」と捉える態度は、北宋中
期の梅堯臣らだけにとどまらず、南宋期にまで継承されており、北宋中
期の梅堯臣から南宋末の葛立方に至るまでの間にも、次に示すように陶
淵明詩が「平淡」、或いは「淡」と評されることに言及した例を、幾つ
も挙げることができる。

所貴乎枯澹者、謂其外枯而中膏、似澹而實美、淵明・子厚之流是也。
若中邊皆枯澹、亦何足道。

枯澹を貴ぶ所の者は、其の外枯れて中膏なるを謂ふ、澹に似て實は
美しきは、(陶)淵明・(柳)子厚の流是れなり。若し中邊皆な枯澹
なれば、亦た何ぞ道ふに足らん。

蘇軾「評韓柳詩」(蘇軾文集卷六十七)

中華書局 一九八六年)

昔蘇武・李陵之詩長於高妙、曹植・劉公幹之詩長於豪逸、陶潛・阮
籍之詩長於沖澹、謝靈運・鮑照之詩長於峻潔、徐陵・庾信之詩長於
藻麗。

昔 蘇武・李陵の詩は高妙に長じ、曹植・劉公幹の詩は豪逸に長じ、
陶潛・阮籍の詩は沖澹に長じ、謝靈運・鮑照の詩は峻潔に長じ、徐
陵・庾信の詩は藻麗に長ぜり。

秦觀「韓愈論」(淮海集箋註卷二十二)

上海古籍出版社 一九九四年)

陶淵明詩所不可及者、沖澹深粹、出於自然。

陶淵明詩の及ぶべからざる所の者は、沖澹深粹にして、自然より出

づるなり。

楊時『龜山集』卷十一「語録」(四庫全書本)
陶淵明詩人皆說是平淡、據某看、他自豪放、但豪放得來不覺耳。其
露出本相者是「詠荊軻」一篇、平淡底人如何說得這樣言語出來。

陶淵明の詩を人はみな平淡だと言うが、私の見るところでは彼はも
ともと豪放なのだ、それに気付いていないだけなのだ。その本性
を表したのは「詠荊軻」一篇であり、平淡な人に、どうしてこんな
表現ができるだろうか。

朱熹『朱子語類』卷一百四十

(中華書局 理学叢書 一九八六年)

士大夫學淵明作詩、往往故爲平淡之語、而不知淵明制作之妙、已在
其中矣。如「讀山海經」云、「亭亭明玕照、落落清瑤流」、豈無雕琢
之功。蓋明玕謂竹、清瑤謂水、與所謂「紅皺檐曬瓦、黃團繫門衡」
者、奚異。

士大夫 淵明を學びて詩を作り、往往にして故らに平淡の語を爲し、
而して淵明制作の妙の已に其の中に在るをを知らず。「山海經を讀
む」に云ふ、「亭亭として明玕照り、落落として清瑤流る」の如き
は、豈に雕琢の功無からんや。蓋し明玕は竹を謂ひ、清瑤は水を謂
ふならん、所謂「紅皺 曬瓦に檐し、黃團 門衡に繫ぐ」なる者と、
奚ぞ異ならん。

周紫芝『竹坡詩話』(歷代詩話本)

このように陶淵明の詩風に対する「平淡」評は、北宋中期から南宋期
に至るまで継承されており、各々の表現からは、当時の士大夫層に陶淵
明詩が広く読まれ、その飾り気のない「平淡」さが好ましいものと感じ
られていたことが窺われる。もっとも「平淡」以外の属性に陶淵明の本

質を見ようとする、ここに挙げた朱熹の言葉や、よく知られた蘇軾の「然其詩質而實綺、穠而實腴。（然るに其の詩は質にして實は綺、穠にして實は腴ゆ。）」（蘇轍「子瞻和陶淵明詩集引」（樂城後集卷二十一 上海古籍出版社 一九八七年）に引く。）等の視点も存在している。「平淡」についてさらに言うならば、当時において「平淡」という詩風は評価すべきものされ、当代の詩人に対してもこの評を適用することがあったと考えられる。梅堯臣にも、「林和靖先生詩集序」（宛陵集卷六十）で林逋の詩を評した、「其順物玩情、爲之詩則平澹遂美、讀之令人忘百事也。（其れ物に順ひて情を遊び、之を詩に爲れば則ち平澹遂美にして、之を讀むに人をして百事を忘れしむるなり。）」、また「和江鄰幾見寄」（同卷二十七 慶曆六年（一〇四六））で江休復の寄詩を評した、「江子方謫官、復有擬古才。遠寄平淡辭、曷報瓊與瓊。（江子 方に謫官せられ、復た擬古の才有り。遠く平淡の辭を寄するに、曷ぞ瓊に報いて瓊を與へざる。）」等の例を見ることが出来る。梅堯臣自身が自己の詩作に関して「平淡」の語を用いるのも、さらにそれが彼の詩の特色と表す評語として継承されていったのも、当時においては決して孤立して存在した現象なのではなく、このような「平淡」を良しとする志向のなかで生まれたものであることに注意しておきたい。

三 詩評家としての梅堯臣

前章では梅堯臣の自作に対する評価を中心に検討し、梅堯臣自身が他の人物の詩を「平淡」と評する場合があることにも触れたが、次に梅堯臣による他人の作品に対する詩評についてももう少し考えてみたい。梅堯臣によるまとまった量の詩の批評としては、『續金針詩格』・『梅氏詩評』

（いずれも呉文治主篇『宋詩話全編』卷壹 江蘇古籍出版社 一九九八年 収）が存在するが、『續金針詩格』の全十四段、『梅氏詩評』の全二段中一段（もう一段は「詩稟六義」と題されている。）が、いずれも「詩有○○」と題されており、特に「詩有二本」「詩有八勢」等のような数を用いた表現の多用からは、皎然『詩式』等の体裁を強く意識していることがわかる。このように詩格書としての体裁が整いすぎていることなどから、両書は必ずしも梅堯臣の著作とはいい切れず、彼の詩人としての評価の高まりを背景として生まれた偽託の書ではないかと思われるが、郭紹虞氏の『宋詩話考』（中華書局 一九七九年）でもこの二書に言及されておらず、『宋詩話輯佚』（中華書局 一九八〇年）にもこれらを取められてはいない。郭氏も両書を梅堯臣の著作とすることを疑問とされていると思われる。

そこで梅堯臣自身による詩評の様相を知るためには、彼自身の詩の中の言及や、幾つかの詩話に拾われている彼自身の言葉を資料とすることがより確かだと思われるが、このうち詩話のなかでは、すでに北宋中期の劉攽『中山詩話』に、「梅聖俞謂、尹師魯以古文名、而不能詩。（梅聖俞謂へらく、尹師魯（洙）は古文を以て名あり、而れども詩を能くせずと。）」という記述を見ることができ、多くの人の詩評の対象となっていた梅堯臣が、その一方で他人の詩に対する評者でもあり得たことを示している。

また梅堯臣にわざわざ自作を示して批評を求める人物もあったらしく、例えば陳師道『後山詩話』（同）には、次のように記されている。

閔士有好事者、不用陳語常談。寫投梅聖俞、答書曰、「子詩誠工、但未能以故爲新、以俗爲雅爾。」

閔士に詩を好む者有り、陳語常談を用ひず。寫して梅聖俞に投ずる

に、答書に曰く、「子の詩は誠に工みなり、但だ未だ能く故を以て
新と爲し、俗を以て雅と爲さざるのみ」と。

言い古された言葉やありきたりの話を用いない詩作に自負を持つ人物
が、詩を書いて梅聖俞に寄せたところ、「貴方の詩はまことに上手です
が、古いものを新しく表現し、通俗的なものを高尚に表現することがで
きていません」という返書を得たという。ここに詩の評価者として登場
する梅堯臣は「以故爲新」と「以俗爲雅」とを評価基準として示し、か
なり手厳しい意見を述べている。

また、これと同様に詩の批評者としての梅堯臣について記すものに、
『韻語陽秋』巻一の次の章段がある。

梅聖俞早有詩名、故士能詩者、往往寫卷投擲、以質其是非。梅各有
報章、未嘗輕許之也。「讀黃萃詩卷」則云、「鳳凰養雛飛未高、雞鶩
成羣終短。」「讀蕭淵詩卷」則云、「野雉五色且非鳳、知時善鳴雞
若何。」「讀孫且言詩卷」則云、「汲井欲到深、磨鑑欲盡塵。」「讀張
令詩卷」則云、「讀之不敢倦、十未能一曉。」「讀邵不疑詩卷」則曰、
「既觀坐長歎、復想李杜韓。」皆因其短而教誨之也。東坡喜獎與後進、
有一言之善、則極口褒賞、使其有聞於世而後已。故受其授者、亦踴
躍自勉、樂於修進、而終爲令器。若東坡者、其有功於斯文哉、其有
功於斯人哉。

梅聖俞 早に詩名有り、故に士の詩を能くする者、往往にして巻を
寫して投擲し、以て其の是非を質す。梅 各おの報章有り、未だ嘗
て輕がろしくは之を許さざるなり。「黄萃の詩巻を讀む」に則ち云
く、「鳳凰 雛を養ふも飛ぶこと未だ高からず、雞鶩 羣を成すも
翅は終に短し」と。「蕭淵の詩巻を讀む」に則ち云く、「野雉は五色
なるも且つ鳳に非ず、時を知り善く鳴くは雞と若何」と。「孫且言

の詩巻を讀む」に則ち云く、「井を汲みて深きに到らんと欲し、鑑
を磨きて塵を盡くさんと欲す」と。「張令の詩巻を讀む」に則ち云
く、「之を讀むに敢へて倦まず、十に未だ能く一を曉らず」と。「邵
不疑の詩巻を讀む」に則ち曰く、「既に觀て坐らにして長歎し、復
た李杜韓を想ふ」と。皆な其の短きに因りて之を教誨するなり。東
坡 後進を奨與するを喜び、一言の善有れば、則ち口を極めて褒賞
し、其の世に聞こゆる有らしめて後に已む。故に其の奨を受くる者、
亦た踴躍して自ら勉め、修進に樂しみ、而して終に令器と爲る。東
坡の若き者は、其れ斯文に於いて功有るや、其れ斯人に於いて功有
るや。

梅聖俞は若い頃から詩人として著名だったので、詩を作るのが上手い
者は、しばしば文書を寄せてその善し悪しをたずねた。それに対して梅
堯臣はそれぞれに返事の文章を書いたが、むやみに認めたりはしなかつ
た、という。この内容は先に挙げた『後山詩話』の記述とも矛盾しない
ものであろう。ここでは「讀黄萃詩卷」「讀蕭淵詩卷」「讀孫且言詩卷」
「讀張令詩卷」「讀邵不疑詩卷」の五例を挙げて、「みなその短所に關わ
つて作者を教え諭す」ものだと述べており、褒め上手の蘇軾の場合と比較し
つつ、辛口の批評家であったと述べている。これらの詩話の記述から知
ることのできる、忌憚無い批評を求めて多くの人から詩を寄せられ、さ
らにそれに対して遠慮なく意見を述べている梅堯臣は、その生前から詩
人としてのみならず、詩の批評家としても認められていたと思われる。
ではここに引用されている五首の詩の内容から、梅堯臣がどのような
詩を評価しているかについて、少し検討してみたい。それぞれの作品は
かなり長編なので、ここではその全文を掲げて検討することは避け、特
徴的な一首のみ全体を示して検討し、その他については詩全体の内容を

踏まえつつ引用個所の表現についてのみ検討することとしたい。

示されている詩題には幾らか異同や省略があり、「讀黄萃詩卷」は、「讀黄萃秘校卷」（宛陵集卷四十五 至和二年（一〇五五））を指している。この詩では、黄氏の詩作を君子に相応しい楽器である五絃琴の優れた演奏に喩えているが、引用部分では、黄萃の詩のレベルを、「まだ高くは飛べない鳳凰の雛」と表現し、遂に飛ぶことのない鶏や家鴨の群れとは区別しながらも、より一層の修練を積むよう促し、その一方で、世間では理解されないこともあるのだと慰めている。

また「讀蕭淵詩卷」（答蕭淵少府卷）同卷四十五 嘉祐元年（一〇五六）は、平易さを特色とする蕭氏の詩風に対して、本旨を細やかに表現すると俗に近づくものであり、乗り物を疾駆させるような勢いも長く変化に富んだ表現には必要だとして一定の評価を与えつつも、たとえ五色の羽色であっても、野の雉は所詮鳳凰ではなく、鶏のように上手く時を告げるに過ぎないとして、その通俗性に批判的な態度を示している。

「讀孫且言詩卷」（答孫直言都官卷）同卷四十五 嘉祐元年の引用箇所は、井戸の深みから汲み上げた水や汚れを取り去った鏡面が発する清浄な輝きを、古今を通じて変質することのないものとして挙げていますが、これは既に見た、雕琢を経た「平淡」のイメージに連なるものではないかと思われる。また詩中の「我言雖至簡、意切誰見親。（我が言は至簡なりと雖も、意切なれば誰か親しまれん。）」は、私の言葉は簡明だが、そこに含まれる本意は切実だから、誰に親しまれることがあるのかと、辛口の批評家としての自覚を表明している。

「讀張令詩卷」（答張令卷）同卷四十五 嘉祐元年）では、古風な構想への言及、謝靈運「遊南亭」（文選卷二十二）の「園柳鳴禽變」を踏まえた表現などが、張氏の詩が六朝詩に学んでいることを窺わせるが、

引用箇所では、文字の順序が乱れ意味不明の詩ばかりだと、やはりかなり辛辣に批判している。

最後に引用されている「讀邵不疑詩卷」は、正確な題を「讀邵不疑學士詩卷、杜挺之忽來、因出示之、且伏高致、輒書一時之語、以奉呈（邵不疑學士の詩卷を讀むに、杜挺之忽ち來たり、因りて出だして之を示すに、且く高致に伏し、輒ち一時の語をし、以て奉りて呈す）」（同卷四十六）と言い、これも嘉祐元年の作だが、梅堯臣の詩作の理想を端的に表現したものとして注目される。この詩については次に全文を掲げて検討したい。

作詩無古今	詩を作るに古今無く
唯造平淡難	唯だ平淡に造ることのみ難し
譬身有兩目	譬へば身に兩目有るがごとく
瞭然瞻視端	瞭然として視端を瞻る
邵南有遺風	邵南 遺風有り
源流應未彈	源流 應に未だ彈きざるべし
所得六十章	得し所の六十章
小大珠落槃	小大 珠は槃に落つ
光彩若明月	光彩 明月の若く
射我枕席寒	我が枕席を射て寒し
含香視草郎	香を含みて草郎を視
下馬一借觀	馬より下りて一に借觀す
既觀坐長歎	既に觀て坐らにして長く歎じ
復想李杜韓	復た李杜韓を想ふ
願執戈與戟	願はくば戈と戟とを執りて
生死事將壇	生死 將に壇にせんとするを事とせん

ここでも「平淡の境地に造ること」を古今の詩作に普遍的な最高の目標として示し、この境地を具備することによって、両目で見えるように広い視界を見渡すことが可能になると考えている。また邵必（字不疑）の詩作は『詩』召南の正統を継承するものとして評価されており、そのうちの優れたものは明月のような伶俐な光りを放つ珠玉に喩えられている。さらに彼の詩から想起される学ぶべき先人として、特に李白・杜甫・韓愈が挙げられていることにも注意すべきだろう。

このように梅堯臣による詩評のなかにおいても、「平淡」の境地に至ることは詩作の理想として高く掲げられ、それは具体的には井戸の深みから汲み上げた水や汚れを取り去った鏡面、また宝玉から放たれる、明月のような清浄な輝きのイメージで示されている。彼は自分の批評が厳しいものであることを自覚しているが、このような「平淡」の境地は、既に前章で見たように彼自身の詩作の理想でもあったと思われる。また学ぶべき先人として李白・杜甫・韓愈を並列して示していることから、彼が先人のうち誰の詩作に多くを学んでいるかを知ることでも可能であろう。

また、これらの詩のうち「讀黃莘秘校卷」が、九月に母の喪が明けて宣城から開封へ向かい、揚州で年越しした至和二年（一〇五五）の作であるのを除いて、他の四首が全て嘉祐元年（一〇五六）の作であることに注意したい。この年の初めに揚州に在った梅堯臣は、その後開封に至って趙概・歐陽脩等らの推薦を得、國子監直講に補されているが、この年には他にも「答宣閔司理」（宛陵集卷四十五）・「依韻王司封寶臣答卷」（同卷四十五）・「淮南轉運李學士君錫示卷」（同卷四十七）・「還吳長文舍人詩卷」（同卷五十一）等の他人の詩集・詩作を評する詩を制作している。

これ以前にも以後にも梅堯臣がこれほど集中的に他人の詩作・詩巻を評する詩を制作している時期はなく、この年にこれだけ集中的に詩巻を贈られ、それらを批評していることには、当時の梅堯臣の置かれた立場に関わる特別な理由があるのではないかと思われる。朱東潤氏『梅堯臣詩選』（人民文學出版社 一九八〇年）二百三頁の「答張令卷」詩注ではこのことに関わって、「這一次堯臣在揚州、旅居較久、以詩卷相示者不少、（この時堯臣は揚州に在り、旅暮らしがかなり長期間になったので、詩巻を示す者が少なくなかった、）」と述べられているが、このような詩評の詩の制作はむしろ嘉祐元年（一〇五六）に集中しており、著名人からの推挽を受けたことによる名声の拡大、さらに教育機関である國子監の教官への着任により、彼に詩を投じてその批評を受けようとした人物が増加したのではないかと思われる。

四 梅詩評の行方

これまでに見てきたように、梅堯臣を初めとする多くの詩文の作者たちのそれぞれが、詩文の作者として批評される立場にあると同時に、他の人の詩文を批評する側でもあったと思われる。彼らはお互いの批評を吸収しながら詩文を制作し続けていたのであり、それらの言説のうちの幾つかが詩文や詩話の形で現在にまで伝わったと考えてよいだろう。

では既に第一章で見た歐陽脩の梅堯臣詩に対する評価は、同時代においてどのような位置を占め、またその後の時代にどのような影響を与えたのだろうか。北宋中期に歐陽脩以外に梅堯臣詩評した例としては、他に韓維（一〇一七〜一〇九八）『覽梅聖俞詩編』（南陽集卷一 四庫全書本）を挙げることができる。次にその中盤から後半を示してみよう。

姿表穆以秀 姿表 穆まことに以て秀で
 純徳信内充 純徳 信まことに内に充つ
 乃知文章作 乃ち知る 文章の作るは
 中與性情通 中に性情と通ずと
 煌煌新詩章 煌煌たり新詩章
 垂光照昏蒙 光を垂れて昏蒙を照らす
 啓櫝挹荆璞 櫝を啓き荆璞を挹し
 引筵撞景鐘 筵を引き景鐘を撞く
 高篇屢云閑 高篇屢しば閑むと云ふも
 遠思殊未終 遠思殊に未だ終はらず
 譬如巧琴師 譬へば巧みなる琴師の如く
 哀彈發絲桐 哀彈 絲桐より發す
 中有冲淡意 中に冲淡の意有り
 要以心志窮 心志を以て窮むるを要む
 顧惟昧者聽 顧るに惟だ昧者の聽くのみにして
 莫辨徵與宮 徵と宮とを辨ずる莫し
 安得牙曠手 安くんぞ牙曠の手を得て
 提耳發其聰 耳に提して其の聰を發せん
 ここで韓維はまず梅堯臣の詩を、彼の秀でた容貌の内に充ちている混じりけのない徳と通じるもの、つまり作者に内在している徳の外へへの表出と位置づけている。さらに梅堯臣の新作の詩は、明るい輝きを投げかけて暗闇を照らす光に喩えられ、それは山を切り開き荆山の玉の原石を磨き上げ、棟木を受ける横木を引き、黄帝の五鐘のひとつの景鐘を撞く力を有するものとされ、さらにはその優れた詩篇は終結しても、その遠大な構思は極まるところがないとも表現されている。後半では琴の

名人の演奏を譬えとして、悲しげな音色は絲と桐とで構成された形而下の物としての楽器から發されるが、その中にはわだかまりをもたない心が込められていると述べられており、やはり彼の詩句の本質が、彼の内に在る形を持たない徳が言語という形で外面に表出されたところにあると考える点で、前半の考え方を継承し反復するものとなっている。しかし続く句では、琴の名手が聴く者が心でこれを極めることを求めても、徵と宮とを聞き分けることすらできない愚か者が聴くだけだ、という現状に言及し、梅堯臣の詩のこのような本質がしばしば理解されない状態にあることを惜しんでいる。そこで韓維は、どうかして牙曠のような名演奏を得て聴者の耳に届け、彼らの聰明さを啓発したい、つまり梅堯臣の詩がよりよく紹介されることによって、その本当の美点が理解されるよう読者を啓発したいと述べて筆を擱いている。

詩題から明らかのようにこの詩は梅堯臣詩を閲読した感想を寄せたものであり、文学作品である詩を内在する徳の外へへの表出として捉えて、儒教的な修養と結びつけて示そうとする姿勢からは、一方で社交辞令的に当時の社会に通行する倫理の中で無難に褒めておこうとする態度を捉えることができようが、またその一方で、既に見た『六一詩話』やいくつかの詩に表現された歐陽脩の見地とは少し違う目で梅堯臣詩を捉えている、と言うこともできるのではないだろうか。しかしそれでもやはり「譬如巧琴師、哀彈發絲桐。中有冲淡意、要以心志窮。」のような、「淡」の語あるいはイメージの使用には、歐陽脩、あるいは梅堯臣自身の表現が影響を与えている可能性もあるだろう。

またこの他、北宋後期の魏泰（生卒年未詳）『臨漢隱居詩話』（歴代詩話本）にも次のような記事を見ることができ。

蘇舜欽以詩得名、學書亦飄逸、然其詩以奔放豪健爲主。梅堯臣亦善

詩、雖乏高致、而平淡有工、世謂之蘇梅、其實與蘇相反也。

蘇舜欽は詩を以て名を得、書を學びて亦た飄逸なり、然して其の詩は奔放豪健を以て主と爲す。梅堯臣は亦た詩を善くし、高致に乏ししと雖も、平淡にして工み有り、世に之を蘇梅と謂ふも、其の實は蘇と相ひ反するなり。

魏泰が梅堯臣の詩風を蘇舜欽の奔放かつ豪毅な詩風と対比して「平淡」と捉えているのは、やはり「水谷夜行」詩等に示された歐陽脩の詩評を意識したものでろう。しかしここではこれに「高致」、つまり気高い趣に乏しいという保留が付されており、そこに魏泰独自の見方を指摘することもできる。さらにこの『臨溪隱居詩話』ではまた、梅堯臣の詩を次のようにも評している。

梅堯臣「贈朝集院鄰居」詩云、「壁隙透燈光、籬根分井口。」徐鉉亦有「喜李少保卜鄰」云、「井泉分地脈、砧杵共秋聲。」此句尤閑遠也。梅堯臣「朝集院鄰居に贈る」詩に云く、「壁隙 燈光を透かし、籬根 井口を分かつ」と。徐鉉亦た「李少保の鄰を下するを喜ぶ」有りて云く、「井泉 地脈を分かち、砧杵 秋聲と共にす」と。此の句 尤も閑遠なり。

ここで引用されている「贈朝集院鄰居」という題を持つ詩は『宛陵集』には見ることができず、引用詩句は文字に多少の異同はあるが、「南鄰蕭寺丞寄夜訪別」（宛陵集卷六）の第五・六句「壁裏射燈光、籬根分井口。」であると思われる。詩題及びこの對句の直前にある「雖言我巷殊、正住君家後。（我が巷は殊なれりと言ふと雖も、正に君が家の後に住まふ。）」という詩句からは、この詩が背中合わせに建っている家の住人の転居に際して制作された送別詩であることが理解され、引用句は、壁にお互いの灯火が射し、垣根の元にある同じ井戸を使ってきたという両家

の物理的な近さを表現しているが、そこには勿論、一緒に日々を暮らしてきた心情的な親近感が投影されているだろう。日常生活のなかで感じる穏やかな満ち足りた気分を表現したこれらの句は、やはり「高逸」と呼ぶべき高踏的な気分には欠けるが、魏泰は「閑遠」（静かで奥深い）と評し、やはり、『六一詩話』の梅詩に対する「閑遠古淡」の評を想わせる。

魏泰が梅詩を評する「平淡」と「閑遠」とは相い似た状態を言うものであり、いずれも歐陽脩、あるいは梅堯臣自身による評を継承したものと考えることができ、そこには北宋末期における歐陽脩らの詩評の影響の大きさが窺われるが、これは同時に梅詩に対する「平淡」という評価がこの時期には既に固定化していたことも示しているだろう。

では南宋期以降の詩話において梅堯臣詩はどのように評されているのだろうか。特に「平淡」に関わるものを挙げておきたい。本稿では既に幾度か葛立方『韻語陽秋』の記事を引用したが、ここでは巻一の次のような記事を挙げておきたい。

陶潛・謝朓詩皆平淡有思致、非後來詩人怵目瑠瑑者所爲也。老杜云、「陶謝不枝梧、風騷共推激。紫燕自超詣、翠駁誰翦剔。」是也。大抵欲造平淡、當自組麗中來、落其華芬、然後可造平淡之境。如此則陶謝不足進矣。今之人多作拙易語、而自以爲平淡、識者未嘗不絕倒也。梅聖俞「和晏相」詩云、「因今適性情、稍欲到平淡。苦詞未圓熟、刺口劇淺矣。」言到平淡處甚難也。所以「贈杜挺之」詩有「作詩無古今、欲造平淡難」之句。李白云、「清水出芙蓉、天然去雕飾。」平淡而到天然處、則善矣。

陶潛・謝朓詩は皆な平淡にして思致有り、後來の詩人の心に怵し目に刺して瑠瑑する者の爲す所に非ざるなり。老杜の云ふ、「陶謝は

枝梧せず、風騷は推激を共にす。紫燕 自ら超詣あり、翠駁 誰か翦剔せん。」は是れなり。大抵 平淡に造らんと欲せば、當に自ら組麗中より來たり、其の華芬を落とすべく、然る後に平淡の境に造るべし。此くの如ければ則ち陶謝は進むに足らず。今の人は多く拙易の語を作り、而して自ら以て平淡と爲せば、識る者は未だ嘗て絶倒せざるあらざるなり。梅聖俞「晏相に和す」詩に云へらく、「困りて今 性情に適ひ、稍や平淡に至らんと欲す。詞の未だ圓熟せざるに苦しむ、口を刺すこと淺茨よりも劇し」と。平淡の處に到るの甚だ難きを言ふなり。所以「杜挺之に贈る」詩に「詩を作りて古今無く、平淡に造らんと欲して難し」の句有り。李白云へらく、「清水 芙蓉を出だし、天然として雕飾を去る」と。平淡にして天然なる處に造れば、則ち善し。

この章段は特に詩風の「平淡」をテーマとして注目されるが、「平淡」を詩風の特徴とする作者としては陶潛・謝朓が挙げられており、その思慮深さを伴う平淡に高い評価を与えている。さらにその傍証として杜甫「夜聽許十一誦詩、愛而有作」詩（杜詩詳註卷三）の表現を引用しているが、ここには南宋期における杜詩に対する評価の高さの反映を見ることが出来るだろう。また章段の中盤で「たいいてい平淡に至りなければ、自ら華やかな表現から始めて、その花の香気を落とすべきであり、そうした後に平淡の境地に至ることが出来るのだ。」と述べているのは、「平淡」の詩境が詩句の雕琢を通過したところにある一段高い境地として捉えられていることを示しており、既に見た歐陽脩や梅堯臣の認識を継承したものであると思われる。

このように北宋末期から南宋期にかけて、梅堯臣の詩に対してしばしば行われる「平淡」の評は、遡れば歐陽脩『六一詩話』の「閒遠古淡」

「深遠閒淡」という評、あるいは梅堯臣自身が詩作の理想として示した「平淡」を継承したものであり、これらとは全く別の視点から梅詩を捉える発想が生まれることは困難であったと思われる。ここには北宋中期の仁宗嘉祐年間（一〇五六～一〇六三）から神宗熙寧年間（一〇六八～一〇七七）の初めにかけて文壇の領袖であった歐陽脩と、彼を中心とする新しい詩風を開いたグループの影響力がいかに大きいものであったかを見ることが出来るのではないだろうか。

【注】

本稿では梅堯臣詩のテキストとして『宛陵先生集』（四部叢刊本）を使用し、文中では『宛陵集』と略称した。作品の制作年代は朱東潤注『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社 一九八〇年）に拠った。また歐陽脩詩のテキストとしては『居士集』（四部叢刊本）を使用し、作品の制作年代は同書の注記に拠った。